

Think globally, Act locally

2025

2.9, 2.15, 2.16-2.22

Thailand

文部科学省委託 令和 6 (2024) 年度新時代の教育のための国際協働プログラム(初等中等教職員国際交流事業)

タイ政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書



文部科学省委託
令和 6 年度新時代の教育のための国際協働プログラム
初等中等教職員国際交流事業

タイ政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書

バンコク都・ナコーンパトム県

オリエンテーション: 2025 年 2 月 9 日(日), 2 月 15 日(土)
タイ滞在: 2 月 16 日(日)-2 月 21 日(金)

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU はアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドとの間で行われ、これまでに 4,500 人近くの海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1,200 人を超える教職員を海外に派遣してきました。これにより、日韓・日中・日タイ・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々との相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

2015 年からは、この国際教育交流事業の一環として、さらに多くの国の教職員との交流を図るため、国際連合大学の委託を受けて、文部科学省、タイ教育省の協力のもと、新たに「タイ教職員招へいプログラム」が始まり、タイ教職員を本邦に招へいすることになりました。2018 年度からは、新たにタイ政府による日本教職員の招へいプログラムが開始され、日本の教職員も派遣されることになりました。コロナ禍はオンラインで交流を続け、2023 年度に対面交流が再開されました。2024 年度はオンラインと対面交流が組み合わさったプログラムを継続し、全国の応募者から選抜された日本教職員 8 名および ACCU 職員 1 名が参加しました。

タイでは、首都バンコクのほか、ナコーンパトム県を訪問しました。タイ教育省や 6 つの多様な学校・教育文化施設の訪問を通して、タイ教育省が掲げる「Happy Learning」が教育現場においてどのように浸透し、具現化されているのかを観察するとともに、事業で掲げる「新しい学び」や「新時代に求められる教職員像」のテーマのみならず、参加者各自の探究を深められるタイ滞在でした。また、これからの教育を考えるにあたり、海外での経験を通じて、自分自身を相対化し見つめ、教育や教員としてのあり方を問い直すきっかけを促す機会にもなりました。「異文化から学ぶ」「出会いから学ぶ」ことを通じて、参加者の日本教職員はそれぞれの教育現場で今回の経験を活かし、成果を児童生徒、同僚の教職員、地域の方々に伝えています。教育現場のチェンジメーカーとして、彼らのこれからの活躍に期待が寄せられています。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、タイ教育省、文部科学省、タイや日本の各学校をはじめとしたすべての関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2025 年 3 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目 次

1. プログラム概要	5
2. 実施内容・訪問記録	15
3. 参加者の声	39
付録 プログラム写真	47
過去のプログラム実績	56

1. プログラム概要

プログラム概要

1. 背景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、ユネスコの基本理念に基づき、相互理解の促進と持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進しています。その活動の一つとして、アジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的に、未来を担う子どもたちを育む「教職員」を対象とした国際交流事業を日本政府の協力のもと 2001 年より開始し、これまでに日本と韓国・中国・タイ・インドとの間で、4 千人を超える海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1 千人以上の教職員を海外に派遣してきました。その結果、教職員の学びが数多くの生徒・教職員・地域住民に還元されるほか、当事業をきっかけに多くの学校間の国際交流が生まれ、各国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

初等中等教育にかかる日タイ間の交流事業においては、2015 年度にタイ教職員を日本に招へいするプログラムが開始されて以来、毎年 15 名のタイ教職員が日本を訪問し、教職員や児童・生徒との交流を深めてきました。そして、これらの実績が評価され、2017 年に行われた日タイの教育大臣による会談においてタイ政府による日本教職員の受入れが提案されたことを契機に、2018 年に「第 1 回タイ政府日本教職員招へいプログラム」が実施され、5 名の日本教職員がタイを訪問することにより、日本側・タイ側の念願であった双方向での交流事業が開始されました。2019 年度には 7 名、2023 年度は 6 名の日本教職員が派遣され、コロナ禍ではオンラインを通して交流を続けてまいりました。

2024 年度は「異文化を通して学ぶ」・「『出会い』から学ぶ」ことを通して、これからの学びの在り方を考え、問い直し、新たな学びを協創する接点となる機会を提供するとともに文化交流によって日本とタイの友好促進に寄与いたします。事前のオリエンテーションをオンライン・対面で実施するとともに、タイ教育省協力のもと、文部科学省委託新時代の教育のための国際協働プログラム（初等中等教職員国際交流事業）の一環として、8 名の教職員が下記の要項に基づきタイを訪問しました。

2. 目的

- ・日本とタイ教職員の交流促進のため、参加者がそれぞれの考えや教育実践を共有する機会を提供すること
- ・タイの教育事情に関する知識を得てタイに対する理解を深めること
- ・学校間の連携のため、日タイ教職員間のネットワークを構築すること
- ・日本とタイ教職員同士のつながりを強化すること

3. 活動内容

- (1) 学校等の教育施設の訪問
- (2) タイの教職員および児童生徒との教育現場での交流・意見交換
- (3) 教育・文化施設の視察
- (4) 現地滞在前のオリエンテーション（オンラインと対面）
- (5) プログラムでの経験や学び、リソースを活用した教育実践等

4. 日程

オリエンテーション①: 2025 年 2 月 9 日（日）（オンライン）

オリエンテーション②: 2025 年 2 月 15 日（土）（出発前日）

タイ滞在期間: 2025 年 2 月 16 日（日）- 2 月 21 日（金）（6 日間）※日本到着は 2 月 22 日（土）

日付		場所	活動
2月9日(日)	午前-早い午後	オンライン	-オリエンテーション① -タイの教育事情に関する講義 広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 牧 貴愛 氏
2月15日(土)		東京の空港近辺	オリエンテーション② ※フライトの時間によっては出発が2/15 (土)の可能性はある。
2月16日(日)	タイ滞在 第1日目	バンコク	タイ到着 現地オリエンテーション
2月17日(月)	タイ滞在 第2日目	バンコク	タイ教育省表敬訪問 学校訪問
2月18日(火)	タイ滞在 第3日目	ナコーンパトム県	学校訪問
2月19日(水)	タイ滞在 第4日目	ナコーンパトム県	文化・歴史施設等訪問 学校訪問
2月20日(木)	タイ滞在 第5日目	ナコーンパトム県	文化交流
2月21日(金)	タイ滞在 第6日目	バンコク	プログラム評価会 ワットアルン訪問 タイ出発
2月22日(土)	機内泊		日本到着

5.参加者

公募により選抜された、日タイ間の教職員交流に高い関心を持つ自治体または学校の教職員 8 名
ACCU 職員 1 名

6.参加資格

- (1) 日本国籍を有すること。
- (2) 過去に本プログラムに参加したことがないこと(2021 年度、2022 年度を除く)。
- (3) 所属する教育長・学校長等から推薦を受けた、初等中等教育教職員(教育行政職員を含む)であること。
- (4) 健康で、オンラインを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (5) プログラム期間中の意見交換や文化交流活動に積極的に参加できること。
- (6) プログラム期間中の学びや知見を帰国後に児童生徒や学校、地域に伝える役割を担えること。
- (7) 将来にわたりタイと日本の教育交流の推進に寄与できること。
- (8) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的にプログラムに参加できること。
- (9) 習慣や文化の異なる国との交流であることを理解し、突然の変更などにも柔軟に対応できること。
- (10) E メールや LINE を用いて円滑に連絡ができ、また Microsoft アプリを用いて所定フォーマットへの入力
や提出ができること。
- (11) 日常会話レベルの英語能力を有すること。
- (12) オンラインで必要な PC や通信環境を準備し、活用できること。
- (13) プログラムで定められた提出物などを確実に提出できること。

7. 評価と報告

参加者は帰国後、所定の様式により ACCU に報告書を提出する。報告書は、ACCU 編集の実施報告書に掲載する。

(1) 第 1 回参加者報告書提出期限:2025 年 3 月 10 日(月)正午

※主にプログラム中の成果について報告

(2) 第 2 回参加者リフレクション・アクションプラン提出期限:2025 年 3 月 24 日(月)正午

(3) 第 3 回参加者報告書提出期限:2025 年 7 月 21 日(月)正午

※主に帰国後の取組やその成果について報告

8. 渡航費等諸経費

(1) タイ政府が下記について負担する。

- ・ 往復航空運賃(日本(東京)とタイ(バンコク)の国際空港間のエコノミークラス航空券)
- ・ タイ国内の移動に要する交通費
- ・ タイ滞在中の宿泊、食事
- ・ タイ国内のプログラム運営に必要な経費

(2) ACCU が下記について負担する。

- ・ 日本国内交通費: 自宅からオリエンテーション日の会場までの交通費及び帰国日の羽田/成田空港から自宅までの交通費の定額(ACCU の規定に準ずる)

- ・ オリエンテーション②当日(出発前日:2 月 15 日)の宿泊費

注 1:オリエンテーション②当日、開始時刻までに到着可能な交通手段がない場合に限り、前日(2 月 14 日)の宿泊費を支給する。

注 2:帰国当日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、帰国当日(2 月 22 日)の宿泊費を支給する。

注 3:本プログラムは所属機関を代表し、基本的に公務扱いでの参加となるため、日当は各所属先等にて負担する。期間を通して ACCU から日当は支給されない。

(3) 各参加者の負担

- ・ 海外旅行保険料:プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において加入しておくこと。
- ・ タイ現地で使える SIM カードやポケット WiFi など
- ・ 上記(1)、(2)以外の諸経費

(4) 旅券と査証について

- ・ 旅券(パスポート):入国時に 6 か月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
- ・ 査証(ビザ):ビザの取得は不要

9. 現地での使用言語

タイでのプログラムは、おおむねタイ語⇄日本語の通訳が入る予定。

10. 情報管理・その他

以下に関して、あらかじめ了承した上で参加申請すること。

- ・ オリエンテーションやプログラム期間中に撮影された写真等は、文部科学省、ACCU、タイ教育省の作成

する資料やホームページなどの紙・電子媒体で、随時使用、掲示・掲載される。

- 参加者から提出される申請書類にある情報は、プログラム準備・運営のため、必要に応じて、文部科学省、在タイ日本国大使館、タイ教育省、在京タイ大使館に共有される。
※情報は厳重に取り扱われ、本プログラム運営以外の目的で使用されることはない。
- 学校や教育機関など所属先の代表としての参加することにより、プログラムの経験を現在の勤務先の教育実践等に活かすことが求められることを留意されたい。
- 本事業への参加後に、アンケート調査等依頼がなされる。

プログラム日程

日付	都市	時間	内容や場所
2月9日(日)	オンライン	09:50	入室開始
		10:00-13:00	オリエンテーション①
2月15日(土)	成田	15:15-15:30	集合&受付
		15:30-18:00	オリエンテーション②
		18:00-18:30	ホテルチェックイン、休憩
		18:30-20:00	懇親会(自由参加)
2月16日(日)	成田～ バンコク	06:45	集合
		07:00	ホテル出発
		09:15-14:40	成田～バンコク
		15:30-	空港～ホテルへ移動
		16:30-	ホテルチェックイン
		17:30-	現地オリエンテーション
		18:30-	夕食
2月17日(月)	バンコク→ ナコーンパトム	06:30-	朝食、チェックアウト
		08:00	ホテル出発
		09:00-	タイ教育省表敬訪問、開会
		09:30-	タイ教育省タイ国内ユネスコ委員会の「タイの教育」に関する講義
		10:00-	コーヒーブレイク
		10:15-	タイ教育省見学
		12:00-	昼食
		13:00-	出発
		14:00-	カセサート大学実験学校訪問
		16:00-	ナコーンパトム県へ出発
		18:00-	ホテル到着、チェックイン
		19:00-	夕食
2月18日(火)	ナコーンパトム	06:30-	朝食
		07:30-	ホテル出発
		08:10-	ナコーンパトム聾学校訪問
		10:00-	コーヒーブレイク
		10:15-	ナコーンパトム聾学校見学
		12:00-	昼食
		13:00-	出発
		13:30-	プラバトム・ウィッタヤライ学校訪問
		14:30-	コーヒーブレイク

		14:45-	科学技術人材育成促進プロジェクトセンター見学
		16:30-	出発
		16:45-	“プラ・パトム・チェディ”訪問
		17:30-	出発
		18:00-	夕食
2月19日(水)	ナコーンパトム	06:30-	朝食
		07:40-	出発
		08:30-	プッタモントン産業・コミュニティ専門学校訪問
		10:00-	コーヒーブレイク
		10:15-	授業見学
		12:00-	昼食
		13:00-	出発
		13:10-	カンチャナピセク非公式教育センター(ロイヤルアカデミー)訪問
		14:30-	コーヒーブレイク
		14:45-	タイの職人技研究所訪問
		16:00-	出発
		18:00-	出発
		19:00-	夕食
2月20日(木)	ナコーンパトム	06:30-	朝食
		08:00-	ホテル出発
		08:40-	マヒドン・ウィッタヤヌソン学校訪問
		10:00-	コーヒーブレイク
		10:15-	授業見学
		12:00-	昼食
		13:00-	タイの生徒との文化交流
		16:00-	出発
		17:00-	グループディスカッション
		19:00-	夕食
2月21日(金)	ナコーンパトム →バンコク	06:30	朝食 チェックアウト
		07:30	出発
		09:30-	タイ教育省でのプログラム評価会議
		10:00-	閉会式、修了書授与
		10:30-	コーヒーブレイク
		10:45-	暁の寺(ワット・アルン)へ出発
		12:00-	昼食
		13:00-	バンコク現地視察
		17:00-	空港へ出発
		19:00-	チェックイン

		23:55	バンコク～成田
2月22日(土)	バンコク～成田	08:00	成田到着
3月10日(月)正午			・記録用紙の提出 ・アンケートや報告書の提出
3月24日(月)正午			アンケートや報告書の提出
7月21日(月)正午			アンケートや報告書の提出
将来に渡る継続的な活動			・プログラムの知見やネットワーク活用 ・成果普及 ・クリエイティブな教育実践

【タイの教育事情に関する講義(講師)】

広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 牧貴愛 先生

参加者リスト

No.	氏名	所属	職名	担当係
01	石原 清	東京都板橋区立紅梅小学校	副校長	団長
02	岡 真夕子	愛知県立明和高等学校	教諭	文化交流
03	渡辺 大輔	実践女子学園中学校高等学校	ESD 推進部部长	写真
04	野々山 新	愛知県立大府高等学校	教諭	情報共有
05	大澤 栄里	竜王町立竜王西小学校	教諭	文化交流
06	盛田 彩花	長野県丸子修学館高等学校	教諭	写真
07	銅崎 智穂子	小金井市立小金井第二中学校	教諭	文化交流
08	早稲倉 啓吾	愛知県立東海樟風高等学校	教諭	情報共有
09	伊藤 妙恵	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 国際教育交流部	プログラム・ スペシャリスト／ 主任	

プログラム関係機関

<日本側機関>

文部科学省/Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan (MEXT)

<タイ側機関>

タイ教育省/Ministry of Education, Thailand

<訪問校・訪問機関>

カセサート大学実験学／
Kasetsart University Laboratory School (バンコク)

ナコンパトム聾学校／
Nakhon Pathom School for the Deaf (ナコーンパトム)

プラパトム・ウィッタヤライ学校／
Phra Pathom Wittayalai School (ナコーンパトム)

ブッタモントン産業・コミュニティ専門学校／
Buddhamonthon Industrial and Community Education College (ナコーンパトム)

カンチャナピセク非公式教育センター(ロイヤルアカデミー)／
Kanchanapisek Non-formal Education Centre (Royal Academy) (ナコーンパトム)

マヒドン・ウィッタヤヌソーン学校／
Mahidol Wittayanusorn School (ナコーンパトム)

<企画・実施・運営>

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

2. 実施内容・訪問記録

オリエンテーション

タイ出発前にユネスコ・アジア文化センターが開催した2回のオリエンテーションでは、タイ地域研究、比較教育学、教師教育の専門家からタイの教育事情について学ぶとともに、プログラムの目的やねらいを参加者で確認し合った。今年度は、その前の年度に同プログラムに参加した日本教職員2名も招き、プログラムでの経験や学びを共有する機会もつくった。

タイに到着した日には、タイ教育省によるタイ滞在中のプログラムに関するブリーフィングも実施された。

オリエンテーション①

[オンライン] 2025年2月9日(日)



◆流れ

1. あいさつ:

文部科学省大臣官房国際協力企画室
室長 水野 俊晃氏

2. ACCU オリエンテーション

3. タイの教育事情に関する講義:

広島大学大学院人間社会科学研究科
准教授 牧 貴愛 先生

4. 自己紹介

5. 前年度参加者講和:

根岸 彩夏 氏 ・ 後藤 幸洋 氏

6. あいさつ:

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

国際教育交流部部長 栗林 正 氏

7. 参加者打合せ

◆学びや所感

ACCU オリエンテーション:

参加者に求められていることとして「チェンジメーカーとしてプログラムの知見やネットワークを活用し教育実践していくこと」「タイに対する理解を深めること」「新しい学びと新時代に求められる教育像を考えること」が挙げられた。

タイの教育事情に関する講義:

タイの教育事情と文化的な特徴について、短い時間で端的に教えていただいた。

学校体系は6・3・3制であること、また「どの大学にいくか」が重視されている点など、日本と共通点が多いことが分かった。一方で上座仏教の輪廻転生の教えにより、「障がいは前世の悪行」との認識が続いてきたため、福祉が発展しづらかったということには驚いた。タイの人々が障がいをどのようにとらえているのかを知りたいと思った。また、現在はインクルーシブ教育と上をのばす教育が並立している現状があることから、この現状をタイの人々がどう感じているのか、を見てきてほしいとの発言があった。

道徳教育について、仏教教育と国王を元首とする民主主義の紹介があった。タイでは年上・年下の関係が非常に重視されており、「先生がクラスを守る」「児童生徒は先生をリスペクトする」というワイ・クルーという考えがあることを知った。生徒が教員の前で床に頭をつく写真には衝撃を受けた。日本では考えられない状況の写真だが、ワイ・クルーの考えがあることで生徒の安心や教員の働き甲斐につながっているのかが気になった。またタイ人とは「仲良くなれるかどうか」が重要だという紹介もあった。「仲良くなれないと全然協力してもらえないが、仲良くなれば強い」とのことであった。

タイには遠慮(グレン・ジャイ)、顔(ナー)という考えから、「悪いことは言わない」文化があり、改善策を提示することや成績評価が難しい場面があると紹介があ

った。成績(点数)を気にする子供が多いということで、大学入試の過熱もあいまって塾の展開もめざましいとのことであった。

そのほかにもタイでは王室に敬意を払うことや、僧侶にふれないこと、またトイレ事情など、タイで生活するうえで欠かすことのできないルールやマナーについて教えていただいた。短い時間であったが、非常に濃い内容であり、出発を目前に控えた段階でよりタイについて知りたいと思うことができた。

前年度参加者講和:

前年度の参加者より、プログラム中の留意点と帰国後の活動についての紹介があった。後藤氏はオンライン交流会を実施したということで、今後自分でもやってみたいことの一つであるため、非常に良いモデルを聴くことができた。

参加者打合せ:

主に文化交流についての打ち合わせを行った。活発に話をすすめてくれる仲間が多く、非常に頼りがいがあると感じた一方で、自分自身も積極的に発言をしていく必要性を痛感した。

(盛田 彩花)

オリエンテーション②

[成田市] 2025 年 2 月 15 日(土)



◆流れ

成田エクスプレス沿線火災による運行停止のため、銅崎と渡辺先生は 16 時ごろ会場に到着した。全員

が揃うまで他のメンバーはパプリカダンスの練習をしていたとのことである。

①岡先生によるヨガレクチャー

②「プログラムを通じて大切にしたいこと」、「タイ滞在中に注目したいポイント」を確認する。(ワークシート)

・石原、渡辺、大澤、銅崎チーム

コミュニケーションをとること、実情や雰囲気、国民的な優しさについて

・野々山、岡、盛田、早稲倉チーム

グローバルの視点、宗教などの多様性、自分たちとどう繋がるか、ポップカルチャーの観察について

③注意や連絡事項

・パスポートは必ず日に何度も目視で確認をすること

・予定の変更には臨機応変に対応すること

・タイでのエチケット、マナーについて

・帰国後の活動について

・現金について

・服装について

④文化交流について各班からの共有

⑤パプリカダンスの練習

◆学びや所感

予定時刻に遅れているという点では非常に肝が冷えたが、列車運行停止があったからこそ道中での渡辺先生との会話で学ぶことも多く、冒険のようなわくわくした気持ちで前日オリエンテーションを迎えることとなった。

このような初めまじでの状態でも全員で取り組めるヨガを伝授できる岡先生はやはり持っている引き出しの数が違うし、岡先生主導のパプリカダンスも、タイの子どもたちとの交流が目的ではあるが一緒に練習をしたときに各々が練習してきた時間も感じられて、メンバーに親しみをを感じる第一歩となった。

また、オンラインでのオリエンテーションではあまり感じなかったが、ワークシートを用いた意見交流では、校種による考え方の違いをかなり感じた。いつも自分

がもっている視点ではないところからの話が飛び交うので、校内研修や市教研では使わない筋肉を動かしていたような気分だった。これから始まるタイでの研修への緊張感も高まりながら、知識としてもっていたものの小中高のつながりに中学生はいること、自分がまだまだ教育や進路について勉強不足であることも痛感した時間であった。

(銅崎 智穂子)

また、その後の食事の際や自由時間の際にも、日本の教職員の方々と交流をしたが、自分自身にはない、学校経営的な視点が多くあり、学びになった。若さを生かして積極的に動いていこうと誓った。

(早稲倉 啓吾)

プログラムオリエンテーション

[バンコク] 2025 年 2 月 16 日(日)



◆流れ

日程表を基に、あいさつや記念品の担当を確認し、各学校の特色について話をした。

また、ここで初めて研修全体を通して同行する教育省の方、通訳の方と対面した。

確認が済んだ後、行動を共にするメンバーで食事を共にし、自己紹介もかねて、簡単な質疑応答をしながら交流を深めた。

◆学びや所感

予定を確認しただけではあるが、様々なバリエーションの学校に視察に行けることがより楽しみになった。通訳の方の母校であるという話や、事前情報にはないタイの内側の話が聞けて、実地に来ているという自覚が芽生えた。

表敬訪問

タイ教育省表敬訪問

[バンコク] 2025 年 2 月 17 日(月)



タイ教育省（Ministry of Education : MoE）は、首都バンコクのジャンガセーム宮殿を含む庁舎でタイ王国の教育を統括している。教育省の教育資料館には、タイ王国の教育史や功績を伝える展示がまとめられている。

◆特色

タイ教育省（MOE）は、国家の教育政策を担当している。教育の普及と教育機会の提供、さまざまな教育・研究組織への支援などを行っている。また研究、教育関係者、高等教育を希望する地方の学生、生涯教育機関などへの支援も行っている。

- ・タイの教育制度 基礎教育 12 年（～高校学校）無償
- ・5つの教育機関（常任幹事・教育委員会・基礎教育部門・職業訓練門・学問奨励部門）
- ・「教育現場全ての人が幸せとなる学び」を柱に改革を進めている。

⇒教師と教育関係者並びに生徒・保護者の負担軽減

◆訪問内容

○タイ教育省開会セッション

- ・国際教育局長による、オープニングスピーチ
「本プログラムの意義と期待」Ms.チトラダ・チャナム氏
本プログラムを通して、タイの教育機関の理解とタイ日の連携、教職員の文化交流事業を教職員・児童生徒とのふれあいの中から構築してほしいと挨拶があった。
- ・ACCU、日本訪問団からの記念品の贈呈
- ・フォトセッション
- ・代表団体団長（石原清）より開会のスピーチを行った。スピーチでは「交流団として今日までの準備、本プログラムでの期待と決意並びに本プログラムにおけるタイ教育省はじめ各教育機関への感謝を述べた。

○タイ教育プレゼン Dr.サリナパット・タムマズム

・タイの教育について「1 教育省の構造と機能 2 レベルとカテゴリー 3 統計資料 4 現在の教育方針」

＊4 について（HAPPY LEARNING）

①教師と教育関係者及び生徒と②保護者の負担軽減の具体的取組

①業績評価システム、借金、ICT、学校給食、用務職員の募集

②教育格差の軽減、質の高い学校の選定、コーチングシステム、評価システム、卒業全就労システムなど

・質疑応答

「各種進学率について」「教員採用における資格、採用条件」野々山新

「大学」が高校以下の教育機関と管轄を変更した理由について」渡辺大輔

「成績評価によって履修の免除または支援等について」岡真夕子

○教育歴史ミュージアム視察

・タイの教育の貴重な歴史を展示

・王室との深い関わり、影響が分かる展示の工夫並びに展示物に対する質疑応答（随時）

◆学びや所感

○プログラム開会にあたり

タイ日本教職員プログラムにはタイ政府をはじめタイの教育をより良くしていこうとする人々の熱い思いと

努力によって支えられていることを改めて実感した。
日本訪問団として強い使命感と行動力をもって参加したプログラムであり、日本を背負って臨むプログラムであること、参加者全員が多くの学びと交流協定等、期待される成果実現に向けて行動していくことを確認した。

○タイの教育について

タイの教育についてのプレゼンテーションにおいて、「教師・学習者、保護者の幸せのため（負担軽減）」の改革を進めていることが印象に残った。各校へ訪問時の視点としていきたいと感じた。

○ミュージアム見学について

王朝によりタイの教育が発展されてきた歴史を見学することで、国の根幹である教育が国王に支えられていることを確認することができた。また、教育の始まりが寺での僧侶からの教えであり、そこから諸外国の影響により「学校」建設に発展した歴史は、我が国の学制前の寺子屋と似ていることに驚くと共に、僧侶は女性に触れてはならないことから、当時は女子の寺での学びが叶わなかったことに社会背景にある思想が教育に対しても大きな影響を与えていたことに気付かされた。現代における多様性を受け止め世界の手本となる、タイの男女平等、ジェンダーへの寛容な考えが難しいスタートであったことは驚きである。

（石原 清）

学校訪問

カセサート大学実験学校／
ナコーンパトム聾学校／プラパトム・ウィッタ
ヤライ学校／プッタモンthon産業・コミュニテ
ィ専門学校／カンチャナピセク非公式教育
センター（ロイヤルアカデミー）／マヒドン・
ウィッタヤヌソン学校

カセサート大学実験学校

[バンコク] 2025 年 2 月 17 日(月)



当该校では、タイ語、イングリッシュプログラム、マルチリンガルプログラムの3つのプログラムを提供している。校訓は Wisdom、Endurance、Stability、Morality である。小学校～高校まで対応しており、アメリカ、日本など海外との交流に力を入れている。他国との交流のほか、障害のある生徒に特化したプログラムが3つある。高校までの進学と、大学までの進学をサポートしながら自閉症、成長に遅れのある生徒もサポートしている。

校訓にそって小学校から高校まで教育している。多様性、個性のある学生に対して対応できるように様々なカリキュラムを作っている。学問科目以外に個人の好みに合わせて、音楽、芸術などにも力を入れている。ギフテッドな学生などにも対応しており、芸術などの

大会などにも参加させている。卒業後はほぼ全員大学へ進学する。大学進学のために、目的意識を高めるガイダンス、コンサルティングを行っている部署がある。特別支援生徒のための教育研究センターがあり、3つのスペシャルプログラムを設け、LD、自閉症、発達不全の生徒に対応している。他の学生とともに学習させる環境を作っている。特別支援の生徒の割合は一つの学年ごとに 10 人以下（平均5人～6人）いる。発達障害は、個人によって異なるため、小1は 10 人くらい、小2は 5 人くらいを受け入れ、普通のクラスに戻れるように支援も行っている。

小学校のカリキュラムについて、小1～3まで教科は異なるが、目的は教育省の目標と同じで（数学は日常生活でも使えるようになど）「幸せに生活を送れるようにすること」である。小学 4 年生～6 年生になると経済、社会、テクノロジー、倫理、道徳、中学校への準備を指導する。

中高のカリキュラムについては、アクティブラーニング、実践的な学問指導が大きな特徴となっている。中学では数学・科学・テクノロジーをより詳細に学べるようにしている。高校になると文理選択を行う。文系科目は言語系1（フランス語・日本語・中国語・韓国語）、言語系2（数学あり）、社会系に分かれる。理系は物理化学と生物に分かれる。

◆訪問内容

カセサート大学実験校の教育の特徴について①教育システム全体②小学校教育③中高教育④特別支援教育の順番に説明を受けた。その後、キャンパス見学、授業見学を行った。

キャンパスの環境は整っており、広大な敷地内にすべての施設がある。教室の後方には、担任、指導助手（実習生）の座席があり、終日そこで過ごすとのことである。生徒からの相談にすぐに対応できる環境になっており、生徒と教員との心理的距離がとても近いと感じた。授業参観は小5の STEM 教育を参観した。また、実際にフードトラックを実施している会場を訪れ、生徒の活動の様子を観察した。ランチルーム、日本語学習のためのヒゴタイセンターを見学し、中庭で集合写真を撮影した。

大澤栄里先生の代表あいさつは、「キーワードに「Happy」「誰でも成長できると信じている」が本当に素晴らしいと感じた。教員の話し方があたたかく、生徒のきらきらした笑顔も見られて、学ぶ楽しさを伝えている学校だと感じた。子どもにHappyを与えるために教員同士も Happy に家族のように過ごしている。」というものであった。

◆学びや所感

初期教育から大学まで、そして生徒の個々の特徴に応じたきめ細かい教育プログラムが組まれており、そのための教員配置も十分にされていると感じた。また、高度な学問を学習するプログラムと、人間教育のプログラムの2本立てで行っており、生徒の幸せな人生を目的とした教育が行われていることに感銘を受けた。特別な支援を必要とする生徒に対しても、個々の発達状態に応じたプログラムが組まれており、さらにそれらが柔軟に変更可能である点も素晴らしいと思う。

シニアプロジェクトについては、高校1年生でテーマを決め、後半はテーマを提出して承認、高2からリサーチを始め、評価が行われるということで、3年間を通じてじっくりと研究が進められる環境が良いと思った。高校の文理選択のために、中学の選択科目を通じて自分の進みたい道を探していくというのも、納得できた。

野々村新先生の質問で「仏教徒以外の生徒は、仏教徒でない学生はどうしているか。仏教徒以外の生徒との共生について」が出たが、「仏教徒でない生徒で厳しい家庭は仏教行事等には参加しないが、厳しくなければ参加する。参加しない場合はレポートを準備する。」という回答で、生徒の多様性をごく当たり前に尊重していると感じた。

特別支援プログラムについて、学習障害、自閉症、発達障害等様々な生徒に対応しており、教員は教科の担任で特別トレーニングを受けて担当することに驚いたが、きめ細かい指導がなされており、生徒にとっては安心できる環境であると感じた。

英語教育についても小1～2はタイ人教師と、小3～ネ

イティブ教師とも学び、中高になると、週5回コマに増え、そのうち3～4回はネイティブ講師、1～2回はタイ人教師と文法を学ぶなど熱心に取り組まれていることがわかった。

(岡 真夕子)

ナコーンパトム聾学校

[ナコーンパトム] 2月18日(火)



◆特色

幼稚園から高校生までの主に聴覚障害を持つ生徒のための教育機関である。近年では、知的障害者や自閉スペクトラム症を持つ生徒も受け入れている。低学年時にはシュタイナー教育を積極的に取り入れ、高学年では職業就労につながる実用的スキルの習得がカリキュラムに組み込まれている。とりわけ、保護者の家庭が農家であることも多いために、50,000 m²に及ぶ広大な敷地に水田や畑、畜産場などを整備することで、特色ある農業実践活動が行われている。

◆訪問内容

①ナコーンパトム聾学校校長スクジャイ・チャイマツト先生よりご挨拶

学校の沿革や概要が紹介された。

概要は次の通りである。

開校当初は視覚障害者を対象としていたが、2003年より現在の名称へ改称するとともに、聴覚障害を受

け入れるようになった。近年では知的障害者や自閉スペクトラム症を持つ生徒も受け入れている。スクールポリシーは、ラーマ9世の「足るを知る経済」という哲学に影響を受けている。障害を持つ生徒は就職に困難を抱えることが多いが、自ら生きる手段を確保できるような教育を目指している。本校職員の採用条件は、手話ができることである。最初は十分にできなかったとしても、授業成立の要件となるため必須である。

この挨拶の後、ビデオにて学校の映像が紹介された。

②概要に関する質疑

Q.聴覚障害者に対して、英語はどのように教示するのか(岡 真夕子)

A.タイ語の手話と英語の手話を比較しながら教えている。例えばリンゴ。タイ語ではジェスチャーらしさが、英語ではアルファベットを意識した表現が行われている。実際にその動作を行うことを通して授業を進めている。

Q.就職が困難とのことだが、具体的な就職先を紹介してほしい(大澤 栄里)

A.大きく3つに分けられる。第一は農家が多いので、農業を継続する選択肢。第二に一般企業への就職。そして第三に進学である。本校は各家庭に寄り添った指導が求められるので、ヒアリングを大切にしている。その結果として、本校のカリキュラムに農業が積極的に取り扱われてきているという側面がある。特に農業面では、最新技術を学ぶことができるようにすることで、各家庭にて行われている農業の促進につながることもある。一般企業、デパートやスーパーなどの接客への就職も見られる。また、手話の通訳担当として政庁機関へ採用されるケースも存在している。教育学部を出て、本校へカムバックする人材もいる。卒業生の教員も間々見られるし、他校にて教員となる事例も多い。学力や本人の特性に応じて一般の大学への進学を進めることもある。

Q.障害者雇用促進法のような制度はタイに存在するのか(野々山 新)

A.100人以上で必ず1人を雇うべきとされている。ただ、もし雇わなければ、その分の社会保険料を支出すればよいこととなる。障害者への経済支援も必要とな

るため、1か月800バーツを付与されている。ほかにも障害の程度や医師の診断結果によって個別支援を実施する場合もある。社会が守ることも大切だが、自身で守ることも大切であると教育をしている。

Q.手話通訳者の維持発展についていかなる課題があるのか(渡辺 大輔)

A.タイにおいては比較的通訳者がいる。イベントで必要になる際には、各地区の人員を集めることもできる。

③教育省代表挨拶(Sarinapat Dhamabus)

タイと日本の文化交流を目的に事業を継続している。SDGs4番の「質の高い教育をみんなに」を意識しながら、意見交換ができれば幸いである。学習者のスキルをいかにして高められるのか。今回のミッションは、さまざまな教育機関を巡る。とりわけ、特殊な条件を持つ教育施設からも学ぶことは多いことだろう。ぜひ多くの意見交換を期待したい。

④訪問者代表挨拶代表挨拶(盛田 彩花)

「質の高い教育をみんなに」、とは重要であると同時に、簡単ではないと痛感する。貴校ではその最前線を目の当たりにすることができると期待している。日本では、さまざまな支援を必要とする生徒が急増している。今回の経験を日本に還元したい。

⑤手話の紹介

こんにちは、元気ですか、ごめんなさい、学校、先生(教える人)、学生(学ぶ人)などの手話が紹介された。特に注意する点として、手の動きの明瞭さ、手の高さも意味があるので、はっきりすべきことが指摘された。また、拍手は音が聞こえないので、両手を広げて廻旋する動作を行うことを説明された。

⑥学校見学

文化祭直前のために、取り組んでいる様子を中心に見学した。小学低学年のシュタイナー教育の事例となる算数では、輪になって数を数えながら歩を進める学びを行っていた。高学年では、農業への取り組み、伝統芸能を学ぶ踊りや音楽、職業スキルを学ぶ食品カッティング・カービングや金属加工、食品製造(カフェ、野菜海苔巻き、ココナッツの生地で餡子を包んで蒸し上

げる伝統料理)の様子を見学した。学校内には「デジタルシティズンシップ」のポスターが張られていただけに、IT分野での取り組みも確認したいところであった。

⑦記念品贈呈(銅崎 智穂子)

日本からは個包装のお菓子を多数盛り合わせて贈呈し、その場で生徒にも配付していただいた。このこともあって生徒の笑顔が多く見られ、双方にとって有意義な訪問体験となった。

◆学びや所感

①教師と生徒の関係性

多様な障害を持つ生徒を受け入れているという特徴も背景として、生徒と伴走する教師の姿が印象的であった。教師から生徒へという一方向的な関係性ではなく、生徒の自立を促し、支援するという関係性が目指されているものと考えられる。この点は、特別支援教育でなくとも参照すべきものであろう。

②シュタイナー教育を取り入れた個性を尊重する学びの在り方

観察できた授業の様子は極めて限定的であるが、シュタイナー教育の実践場面を確認することができた。この教育方法は個性の尊重に特徴がみられるもので、インクルーシブ教育を推進していく上で一つの参照軸となりうるだろう。生徒の実態を踏まえた時に有用であるならば、学校経営の方針として検討することも考えられよう。

③卒業後のキャリアデザインを支援する教育の取り組み

多様な障害が就労状況に悪影響を与えているという社会的背景を踏まえ、農業技術や金属加工、野菜のカービング、染め物などの実用的スキルを習得させられるようカリキュラムが構成されていた。卒業後の経済的自立を目指していることが鮮明である。一方、校内にはデジタルシティズンシップに関するポスターも貼られていたこともあって、IT分野での活躍を目指す取り組みがなかったのか、確認してみたいところであった。

(野々山 新)

プラパトム・ウィッタヤライ学校

[ナコーンパトム] 2月18日(火)



◆特色

タイのナコーンパトム県にある大規模中等学校であり、質の高い教育、学生育成活動の促進、学業とスキル向上のための課外活動の両方を重視したバランスの取れた学習環境で知られている。中等教育から高等教育までの教育を提供しており、カリキュラムは一般教育と理科数学コースに分かれており、厳格な教育基準と、高等教育に向けた優れた学生の準備で有名である。音楽、スポーツ、芸術、さまざまな競技のスキル開発を目的とした活動を積極的に支援しており、さらに理科数学専門教室や才能開発プロジェクトなどの特別プログラムも実施している。

タイ中部地域で最も名声のある学校の一つとされており、卒業生はさまざまな分野でキャリアを積み、地域社会や国のリーダーとなっている。

◆訪問内容

①学校紹介として、校長先生のご挨拶とコースディレクターの先生より学習カリキュラムについての説明があった。

7～9年生:ギフテッド科学数学プログラムを設置

10～12年生:科学・数学・技術・環境のコアコースを設

置・優秀クラスを検討中

評価は下記の2つを用いて算出しているとのことであった。

形成的評価:観察・学習ノート・ワークシート・自己評価

総括的評価:ループリック・テスト・実技試験(実験も含む)

フィールドワークを各学年で多く実施しているとの紹介があった。

7~9 年生:サイエンスパーク見学・環境研究所への校外見学・地元の歴史文化キャンプを通して、主に環境問題への理解を深める。

10~12 年生:海洋サイエンスキャンプ・動物園・化学プロジェクトプレゼンテーションを行い、生物・物理・化学の学びを深めている。

②文化交流として、日本のダンス紹介ということで「パプリカ」ダンスをタイの生徒たちに日本語歌詞の意味を伝えながら振り付けを教えて、一緒に踊った。また、逆にタイの伝統舞踊を生徒たちから教えていただき、輪になって一緒に踊り、とても盛り上がった。

③STEM 教育の発表パフォーマンスとして、高校生による3つのデモンストレーションがあった。

(「科学技術人材育成促進プロジェクトセンター」のセクションで詳細情報がある)

・温泉卵作り:「熱交換」

熱伝導と対流によって卵の内部へ熱が伝わり、白身と黄身が異なる固まり方をする現象についての実演があった。

・アイスクリーム作り:「液体の凝固点」

砂糖を加えると水分の凝固点が下がり(凝固点降下)、さらに塩をアイスクリーム周りの氷に混ぜると氷が急速に溶けると同時に周囲の温度を下げ、アイスクリームの液体をより早く冷やすことができる実験を披露してくれた。

・ドローン:「プログラミング」

校庭に特別に設置されたドローンコースにて、高さ・方角・スピードの数値をプログラミングして、ドローン操作をさせていただいた。

◆学びや所感

・公立ハイレベル校でカリキュラムの中身が充実しており、中等教育6年間の学習の流れがしっかり連続してい

るように感じた。

・コースディレクターや教務などの主任教諭に、女性の先生が多かったのが印象的であった。

・共学校で男女ともに、やや控えめだがとても澁刺とした素直な生徒が多かった。

・生徒の英語力は、日本の高校生と同レベルの様子であった。

・今までに大きなシンポジウムなどを主催したことがあるようで、代表生徒のプレゼンは堂々としてわかりやすい発表が多かった。

・教師が一方向的に知識を教えるのではなく、生徒の主体的な学びを支援しようとしていた。

・探究学習を導入して、学校全体で生徒中心の学びを促進しようと取り組んでいた。

・STEM 教育では基本的な実験を行い、丁寧な説明できていたが、イノベーションまでは到達していなかった。「今後の課題である」と先生方も認識されていた。

探究授業の促進や理数教育の重視など、タイも日本と同じ方向で教育改革を進めていることがよくわかった。講義とパフォーマンス(実験など)の授業構成割合をどうするか、評価の公平性をどのように担保するか、など抱えている問題点も両国共通のものが非常に多かった。

タイの「Happy Learning」の考え方に触れ、「楽しさ」が学びを深める大切な要素であり、「生徒主体の学び」の重要性を再認識した。どの生徒も笑顔で楽しそうに学んでいたのが印象的だった。

(渡辺 大輔)



◆科学技術人材育成促進プロジェクトセンター (プラパトム・ウィットヤライ学校)

プラパトム・ウィットヤライ学校の中にあり、STEM 教育を進めるセンターとして選ばれている。

創造的に考え、説明することで問題を解決し、イノベーションを生み出すことを目標としている。知識とスキルを応用し、科学・数学・テクノロジーを統合して学ぶことで、問題を解決したり、現実の生活に生かせる方法を考えている。

STEM 教育は、以下の3つの方法で行われている。

- 1 一般の科目の中に取り入れる(統合)
- 2 選択科目の活動を企画する
- 3 課外活動グループ(部活動)での活動を企画する
(場合によっては、1と3のような形で生徒は参加している。)

STEM の活動は、学習内容を調整し、1 学期に 1~2 回、学習内容に関連する課題を設定して行われている。単なるレクチャーではなく、体験をすることを大事にしているため、教室の外での体験を追加したり、コンテストなどの特別なイベントに参加したり、生きた展覧会を行ったりもしている。

試験のための勉強だけではなく、日常生活の中で使える知識を多く追加している。

◆流れ

プログラムの流れとしては、

1. STEM 教育の説明

2. 具体的な3つの活動についての説明

(温泉卵作り・アイス作り・ドローンのプログラム)

3. 各活動の生徒の成果を見学

であった。

STEM 教育の特色については、上述の通りなので、具体的な活動の様子から記録する。

各学習において共通しているのは、4つのステップである。

- ① 出された課題に対して自由に試してみる。
- ② インターネットなどを使い、どうやったら解決できるか考える。
- ③ 調べたことをもとに、計画を立てて実行する。
- ④ 課題をクリアできるかテストする

今回は、高3の生徒が温泉卵づくり、高2の生徒がアイスづくりについて、実際に活動した各過程の内容を説明してくれた。

生徒たちは、戸惑いながらも英語を使って一生懸命説明している様子が印象的であった。一部の生徒にインタビューしたところ、将来は医者を目指すという学生もいた。

ドローンの活動では、部活動のような形でやりたい人が参加して活動している場面も見られ、生徒の興味に応じて、学習できるということもわかった。

◆学びと所感

自分でものを作るということやイノベーションを生み出すことを大事にしているというお話が印象的だった。日本からアイデアをもらって普通の卵を温泉卵として売ることによって市場価値をあげられるという発想や、市場でアイス売っている人が容器を揺らしているのはなぜだろうという視点など、日常生活と学習を結びつけながら活動を組み立てているところがとても参考になった。

教室外での活動を積極的に追加しているところや遊園地で遊びながら学ぶところなども生徒にとってはとても魅力的で学習意欲も上がるだろうと思った。

私は小学校教員なので、小学校での活動を思い浮かべながら見学していた。小学校では体験的な活動は多くあるが、学習とうまく結びついていないことも多くあるなど反省した。こちらの学校を見習って、日常生活と学習を結びつけられるような活動をたくさん仕組みたいと

思った。

ただ知識を得るだけではなく、実際にやってみることで知識と経験が結びつき、確かな学力となるのではないかと感じる。

(大澤 栄里)

プッタモントン産業・コミュニティ専門学校

[ナコーンパトム] 2月19日(水)



◆特色

- ・日本でいう高校～専門学校
- ・地域との繋がりが強固
 - 企業の方、農家、元銀行員の地域の方から積極的な活動支援
- ・地産地消の取り組み
- ・仏教の教えを基盤として教育に携わっている
 - 体操や瞑想の時間がある

◆訪問内容

バスを降りた瞬間から大きな歓迎があった。生花の飾りを校長先生自ら日本教職員に掛けてまわり、記念撮影後はきらきら星の演奏があった。きらきら星の演奏は特別な支援を必要とする生徒が一生懸命演奏してくれた。

室内に入り、学校紹介ビデオを見た。

少しの質疑応答があり、その後校舎内を見て回った。校舎の中に大きな農場があり、そこにはバッファローなど家畜もいた。地域の農家の人もボランティアで活動に参加している。

交流活動を行い、日本からは着物体験と日本茶体験を提供した。

その後は家庭科コースの学生の料理を見たり、ホテルサービスコースの学生の用意した会場で料理を食べたり、パリスタの提供など楽しんだ。

◆学びや所感

「すぐに働くことができるように」というキーワードで学校全体が動いていた。

実際にサービスを受けて昼食をとったが、正直、ここで食べた食べ物が一番美味しかった。気遣いも素晴らしく、飲み水やお替り、替えの皿など細かい部分に目を配っていたように思える。また、学校として地産地消の取り組みを行っている。ココナッツソーダの商品開発を行い、賞ももらったようであるが、買って帰りたいくらいには美味しかった。

私自身が商業科の高校の教員であるため、すぐに働くことのできる人材育成という点で考える場面が多くあった。「すぐに働くことができる」＝「お金を稼ぐことができる」というわけではないと思う。しかし、社会のニーズに合った育成をすることも間違いないと考える。今回視察したプッタモントン産業・コミュニティ専門学校は、即戦力的な育成を施しているように感じた。では、私の学校の生徒が就職していく就職先はどんな生徒を求めているのだろう。資質・能力に関して改めて話を伺い、調べていこうと思う。

本視察の気づきとしては、ニーズに合わせた育成である。そのニーズが生徒にあるのか社会にあるのか、国にあるのかはよく考えていこうと思う。

(早稲倉 啓吾)

カンチャナピセク非公式教育センター（ロイヤルアカデミー）

[ナコーンパトム] 2月19日(水)



◆特色

元来、王室でしか伝わってこなかった 10 種類の職人技を伝えるため、王室の支援を受けて設立された教育施設である。国内では唯一、国立でありながら nonformal 教育を実施する施設でもある。（nonformal 教育とは、基礎教育以外の、自己開発や職業技術・資格習得を目指した教育を指すものである。塾等もこれに含まれる場合がある。）

授業料は無料で王室伝統の職人技術やタイの伝統工芸を身に着けることができる。学生は基礎教育を終えた一般人（特に高齢者）が多く、外国人であっても通うことが可能である。就学期間は短期のもので 1 週間程度、長いものは 800 時間程度になる。主に 2 種類のコースが設定されており、一つは王室由来の 10 種の職人技（彫刻・絵画・面づくりなど）を学ぶコースと、もう一つはタイの伝統大衆文化（料理・工芸品など）を学ぶコースである。

◆流れ

1. オリエンテーション

当施設の概要について説明を受けた。上記の「特色」でまとめた内容はこのオリエンテーションで説明された内容である。参加者から「ここで身につけた技術を仕事に生かしている学生はいるのか。趣味で通っている学生もいるのか」という質問がでた。その回答として、「職業のために技術をみにつける学生よりも、個人のスキルアップとして通っている学生が多い。誰でも学ぶことのできる学校を目指している」との回答があった。

2. 授業（作業現場）の見学

彫刻、面作り、絵画の授業（作業風景）を見学した。

3. プログラムの体験①（屋内）

彫刻/面作り/絵画のいずれかの体験をした。

4. プログラムの体験②（屋外）

会場を移し、料理、ヤードムづくり、花飾りづくりの体験をした。

5. 作品見学と記念品交換

卒業生の作品が展示されている会場を見学した。最後に記念品を交換した。

◆学びや所感

個人のスキルアップと、伝統の継承を同時に推進する素晴らしい施設だと感じた。学生は、大学生くらいの若者、仕事と両立して通う社会人、退職後の高齢者、僧侶など非常に多岐にわたっていた。何人かの学生に話を聞いたが、通う目的も「仕事にいかすため」「老後の時間つぶし」「友達作り」「伝統技術に興味があるから」など様々で、真に「誰でも学ぶことのできる学校」が実現されていると感じた。作業している姿をみても、真摯に取り組んでいる姿が印象的で、中にはバンコクからバスを 4 回乗り換えてくるという学生もあり、モチベーションの高さがうかがえた。学ぶ目的に「友達作り」と答えた学生がいたが、その通りに、特に料理のコースなどは学生同士の仲の良さがうかがえた。

「生涯学習」という言葉は日本でも叫ばれているが、日本では国や地方自治体が、当施設のような、個人

のスキルアップやコミュニティづくりを推進している例はまだまだ少ないと感じている。その点等施設のように、国が主導して、生涯学習を推進する施設がある点は日本も見習うべき点だと感じた。また、このような施設が日本にあれば、教員の研修の場としても大いに活用できると感じた。新しい技術をみにつけることはもちろん、教員として教員以外の人々と共に学ぶことで得られる知識や経験は非常に良い研修になると思う。

個人的に興味深かった点は、料理作りの体験でタイの食に対する人々の認識を聴けたことである。仏教の浸透しているタイでは、金色（黄色）のものが縁起がいいとされており、黄色を濃く出すためにアヒルの卵の卵黄を使っているという話が面白かった。また伝統菓子は作る人が減ってきており、買って済ませる人が多いという現状は日本と同じだと感じた。私は個人的に料理が好きで、日本の伝統的な料理（おせちなど）を作りたいと思ったとき、周りに教えてくれる人がいなかったため、本を読んで独学で身につけた。伝統的な技術を身に着けられるというのは本当に楽しいことだと感じた半面、教えてくれる人や機会があれば、もっと楽しいだろうなと感じたことがあった。「伝統的な料理は買っちゃうことが多いけど、自分でも作ってみたいな」と思っている人は、タイでも日本でも、多いのではないだろうか。そのためもし日本でも、伝統料理を無料で学ぶことのできる学校があれば、かなり大きな需要があると思われる。

（盛田 彩花）

マヒドン・ウィッタヤヌソン学校

[ナコーンパトム] 2月20日(木)



◆特色

タイ国内外で科学技術分野のイノベーターを育成することを目的とした学校であり、次の特徴を持つ。

1. 理数教育に特化しており、実験や研究活動が充実している。
2. 240名の定員を競って厳しい入試が行われるため、入学生が非常に優秀である。
3. 大学等と連携した研究などを通して、国際オリンピックでも多数表彰されている。
4. 全寮制が整備されており、学業に専念ができる環境を持つ。
5. 海外の大学や高校と連携しており、留学プログラムなど国際的な教育機会が提供される。

◆学校見学

1. 概要紹介、自己紹介

全員の自己紹介の後、ビデオにて理数教育に特色を持つ教育の様子が紹介された。

2. 質疑応答

Q. 今、克服すべきと考えている課題はどのような点にあるか（岡 真夕子）

A. 第一に教師と生徒の間のジェネレーションギャップによって思考プロセスに相違が見られることだが、学習支援における障壁の一つとなっている。この克服に

向けて、カリキュラム再編会議の周期を早めることで、生徒のニーズに沿った学習環境の確立を目指している。また、教師の力量向上は絶えない課題である。授業法の改善や、教師教育の方法を絶えず検討しているところである。

Q.理数科目の学びについて、理論を学ぶことと実践的に学ぶことはどの程度の比率であるか(早稲倉 啓吾)

A.理論を学ぶことが7割程度で、研究活動が3割程度となっている。講義のみでは生徒の学習意欲を喚起することは難しいので、生徒のニーズを踏まえて学習内容を調整したりすることで、主体的に取り組めるように心がけている。

3. 記念品交換

4. 学校見学①(図書館)

他校と比べても蔵書数が多く、協働研究スペースを豊富に設置するなど、生徒の探究活動を推進する重要な拠点の一つである。書籍の選択では大学の知見などを踏まえており、生徒のリクエストにも応じている。理数系や国際オリンピックに関する情報が中心となるが、一般書や小説等も配架しており、読書を促す取り組みも行っている。ただ、近年の読書離れの傾向は顕著であり、生徒の研究活動の負担も鑑みると、生徒個々人が立てた読書数目標を達成できれば十分と捉えている。なお、専門書は各教師の研究室が充実していることから、生徒は研究室を活用する。リファレンス機能については生徒が自身で検索機能等を用いて対応しており、あまり探究活動を支える役割を付しているわけではない。参観時、生徒は若干名が学習に取り組んでいた。この機会も含め、生徒が ChatGPT を用いている場面は散見された。

5. 学校見学②(授業)

2つの授業を見学した。第1は、高1数学の授業で、 Σ の計算に取り組んでいた。生徒は BYOD によるタブレット等のデバイスを用いて学習に取り組んでいた。学習内容や授業方法は特筆すべきことはないが、ノートや教科書、筆記用具は一切机上には置かれていないことが印象的であった。第2は、高1物理の授業で、重りとばねを使った実験を行っていた。実験方法はクラウドにて配付されたペーパーに示され、グループで

実験を進めていた。担当教師によると、実験は各学期で4回、年間で8回行い、評価方法はペーパー7割、実験で3割としている。生徒は3年時の研究プロジェクトにて質的研究を進めることとなるので、1年時ではその準備として研究のノウハウを蓄積できるよう授業を展開している。物理の教員は13名おり、協働研究を進めていくために風通しは良い。教師の専門性を高めていくために、今月末には教育研究に関する発表を控えている。授業担当時数は週に6コマ程度、とのことであった。この少なさはとにかく羨ましいの一言に尽きる。自身で立てた問いに基づく実験ではないこともあって、実験の様子について特筆すべき点はない。生徒の中にこだわりの強い個性を持つ者がいたが、グループ編成では多少困難を抱えることもあるとのことであった。

6. 昼食と質疑応答

Q.宗教割合はどのようにになっているか。文系科目はいかに位置づいているのか。多文化共生社会を目指す中で存在している課題はあるか(野々山 新)

A.仏教徒が圧倒的に多く、ムスリムが10人程度、キリスト教徒が5人程度である。仏教的な活動については他宗教の生徒は任意参加であるし、全寮制で共同生活していることもあるので、問題が発生したことはない。文系科目は、カリキュラムとして理系86単位、文系18単位と決まっており、そもそも理数系を志望して入学している生徒たちなのでなかなか関心は高まらない。語学系の学習ではコミュニケーションを多く取り入れるなど、飽きないように工夫はしている。本学の創設者は、「科学をどれだけ好きだとしても、文系科目を知らねば(十全な)人間ではない」との言葉を残しており、この理念を紹介しながら生徒に学習へ臨ませている。

Q.図書館の蔵書数は他校と比べてどうか。また、読書離れはいかなる現状にあるか(銅崎 智穂子)

A.私立ほどではないが、多い方であると認識している。特にコミュニケーションスペースの豊富さは他校にはない特徴である。読書離れについてはやはり課題である。読書冊数に応じてポイントを付与するなどモチベーションを高める取り組みを進めているが、学ぶ内容も多いためにわざわざ強く勧めたりすることはしていない。

7. 文化交流

「日本人教職員とタイの生徒の文化交流」のセッションに詳細情報がある。

8. 学校見学②(諸活動)

4つの活動あるいは活動場所を見学した。第1は、高2の化学自由研究活動であった。来週に控えた研究発表会に備えて、生徒がラボで研究活動を進めていた。研究の支援だけでなく、安全管理のためにも、研究活動中は必ず担当教員が同席している。化学の教員は13人で、担当する授業は週に3~6コマ程度とのことであった。

第2は、Artの教室であった。STEM教育の一環としてもArtは重視されているが、理数教育に資するために展開しているわけではなく、自由な表現活動を促しているとのことであった。

第3は、ワークショップラボであった。これは設計や木材加工、金属加工などを行う施設になっており、理工系の生徒が研究活動を進めていた。この生徒たちは、1年時に機械の使い方を学び、2年時にはミニプロジェクトと呼ばれる自由研究を始める。ここでは、合計6時間の配当で、海洋ごみを収集するための装置を作るという課題について各グループで成果を作り、発表を行う。しかし実際には6時間で完成しないので各自の自由時間を活用しているとのことであった。

第4は、生物研究室であった。ここでは、藻から作られる「バイオ炭」を生成して、浄化作用の効果を検証する3人のグループと、thismiaという植物が緑ではなく白いことに疑問を持ち、この酵素について研究をしている1人の活動を確認できた。ただ、いずれも先行研究を追体験している側面があり、オリジナリティに疑問符が付くことには留意しておきたい。関連して、生徒がChatGPTを活用しているシーンを散見できた。AIとどのように向き合っているのか、確認してみたい。

◆学びや所感

驚かされたのは、研究室の設備と、教員の担当授業時数の少なさであった。同校にて求められている教員の役割は、生徒の研究に伴走し、その質を高めていく

ことにこそあるのだろう。日本とタイとを問わず、担当する授業を実際に展開するためには生徒理解、事前の教材研究、事後のフィードバックが必要なので、担当授業時数以上に時間がある。それこそ同校で行う研究活動を支援するためには、確かに1日1コマ程度でなければ難しいのかもしれない。しかし、実際にその環境を創出できるだけの教員数が配置されるかどうかについて、日本の教育行政の通念を鑑みるとなかなか想像ができない。なぜタイでは配置がされるのか。この点に、設備投資がなされていることとも関連するであろうメリハリのある教育行政の存在が想起しうる。すなわち、学校ごとに異なる生徒のニーズや実態を踏まえ、それに要するハード面での環境を整備するのは行政組織であるということ、言い換えると教育活動は社会の責務であると捉えられているのではないか。この点について、現在の日本では教員の自己犠牲によって創出するより他はないという諦念すら私は抱いている。改めて、教育は未来への投資であり、予算を投じてほしいと考えさせられた。ただ、環境整備がこうした重点校に偏ってしまうならば、教育格差を生み出していってしまうことにも留意しなければならない。生徒の成長を一層力強く促す教育行政とはいかにあるべきか、示唆を与える訪問であった。

(野々山 新)



◆日本人教職員とタイの生徒の文化交流

こちらでは、日本人教師とタイ人生徒の文化交流活動を2つ行った。

一つ目は、小金井市立小金井第二中学校の銅崎先生と愛知県立大府高等学校の野々山先生による「書

写」の授業で、高校生の生徒(11名)を対象に、日本の小中学校で行う「書写」の学習を紹介し、体験してもらった。

はじめに、タイにある日本の飲食店で使われている筆文字を紹介すると多くの生徒が見たことがあるという反応をしていた。中には、日本語を自分で勉強して少し話せる生徒や、ひらがなや漢字が少し読める生徒もいた。

体験タイムでは、日本人教師が見回りながら、生徒の書きたい言葉を聞いて、漢字を教えてあげたり、お手本を書いてあげたりして、それぞれの生徒が習字を楽しむことができた。生徒の名前の音に漢字を当てて提案したり、名前の意味を日本語に直して教えてあげたりすることもあった。生徒の書きたい言葉は、「平和」や「太陽」、「美しい」などポジティブなワードや家族・友達の名前が多かった。最後に生徒同士で文字を見合い、何と書いてあるのかを聞き合う時間を取ったが、どの生徒もいろいろな文字が書けてとても楽しそうだった。

時間に余裕があった関係で、書写に続いて「家紋づくり」の活動を行った。野々山先生による日本の家紋についての紹介の後、いくつかの例を参考に生徒たちは家紋づくりに取り組んだ。はじめは、何を描こうかと戸惑う生徒も多かったが、書きだすと夢中になっていた。時間が来て終わりの声を掛けても書き続ける子も多く、熱中していたことが分かった。

二つ目の文化交流は、実践女子学園中高等学校の渡辺先生による「数独」の授業である。(高1生徒16名)

まず、渡辺先生の勤務する実践女子学園の紹介を行った。渋谷を知っているかという問いかけに対し、来たことがあると答えた生徒が一人いた。クイズも交えながら、東京や学校の様子について紹介し、生徒たちは真剣に聞いていた。また、数独についてもやったことがある子や知っている子が5名いた。

そして、数学の学習にはいると、まず3×3マスの魔法陣の問題から出題した。すぐに取り掛かり、最初の問

題は、ほとんどの生徒が簡単に答えを出した。

難易度をあげた次の問題では、悩む生徒もあり、正解者が出るまでに少し時間がかかった。はじめにできた生徒に説明を求めると、英語で解説してくれた。ほとんどの生徒がその説明を聞き納得することができた。

その後、本題の数独のプリントを配布し、生徒たちは集中して取り組んでいた。ちょうどいい難易度だったようで、集中して取り組んでいた。時間が終わっても解き続けるほどだった。

◆学びと所感

「書写」の授業では、筆で書く字の例として「泰」「日」「桜」「富士」「焼肉」を紹介すると、「桜」や「富士」は読める生徒もあり、日本への関心があることやタイ社会の中で日本は身近な存在であることが感じられた。また、楽しそうに話を聞いている姿が印象的であり、生徒たちの異文化に触れる楽しさを感じることができて嬉しかった。

書写を通して生徒と関わる中で、小学校でよく書く漢字を紹介したり、生徒の名前の意味を聞いて、それに合う漢字を提案したりすることができた。はじめは戸惑ったが、コミュニケーションを取ることができて、私自身とても嬉しかった。もっと会話がしたいという思いが強くなり、帰国したら自身の英語力を高めようと思った。やはり、実際の経験は、学びの動機付けになると自分の体験を通して、改めて感じた。

また、数独の学習では、数学に夢中になる生徒の姿を見ることができた。外国人の先生に数学のレクチャーを受けることはなかなかない経験であると思うが、一生懸命問題を解き、時間が来ても解き続ける姿勢が理系の子どもたちらしいと感じた。愛知県立東海樟風高等学校の早稲倉先生が「数学は世界の共通言語だと思う」とおっしゃっていたが、確かに数学が好きな子どもたちは日本にも同じようにいて、同じように熱中して問題を解くことを楽しんでいる。数学の問題は、言語を越えて一緒に楽しめる学問かもしれないと感じさせられた。

(大澤 栄里)

教育文化施設 訪問

プラ・パトム・チェディ
ワット・アルン

プラ・パトム・チェディ

[ナコーンパトム] 2月18日(火)



◆特色

ナコーンパトムのシンボル。タイで最大の仏塔。
タイ王朝よりも前の、ドヴァーラヴァティー時代に建て
られたとされる。

ここの前に訪問したプラパトム・ウィッタヤライ学校の
先生達と一緒に見学をした。我々は南側から時計周り
で境内を一周した。

【仏塔について】(プラパトム・ウィッタヤライ学校教

員)

仏塔は三重になっている。最初の仏塔の形を残しながら、被せるように新しい仏塔を作っていく。そのため、
仏塔はどんどん大きくなるが、大きくなればなるほど
街が盛んになると考えられているため問題ない。ラー
マ 4 世から 6 世の時代に「美しい仏塔は大事にしま
さい」という考えを元に、修復を行なっている。屋根部
分にある白い穴は出入り口である。

【南側】

階段を登った先に、白い仏像がある。

岡先生がニンさんと一緒に参拝をした。白い仏像前
方にある銀色の塔内部から火をもらい、長い線香の
ようなものを鉢に刺す。白い仏像の周りには小さい金
色の仏像があり、そこに金箔を重ねていく。ハスの花
をお供えするとき、ニンさんは花びらを内側に折って
いた。

【西側】

等間隔に鐘がある。仏塔を囲むようにアーチ型の穴
があり、一体ずつ仏像が配置されている。

【北側】(通訳さん)

南側にもあった金箔が貼られていく式の仏像が、屋
根つきの少し高台の空間にあり、数人が参拝している
様子を目撃した。南側とは違い、座った状態で参拝す
るための場所なのだろうか。

北側の仏像は、ラーマ 6 世の真似をして作られた。そ
のため、お腹が少しでている。アユタヤ時代の仏像は
もっと顔が四角いけれど、タイ王朝の仏像は顔が細長
い。

【東側】

金色と銀色の、お椀のような帽子のようなものが屋台
に並べられている。小さな金色の涅槃像がある。ニン
さん曰く、もっと大きい涅槃像が建物内にはあるとの
ことだった。

【プラ・パトム・チェディの立地】(通訳さん)

北が一番大事で、その次に大事にされているのが東
である。昔は現在のように鉄道がなかったため、国王

は運河を舟で渡り、この地を訪れていた。北側から外を見ると、道が真っ直ぐで、その先に市場があるのがわかる。

【プラ・パトム・チェディの立地】(野々山先生)

サナム・チャン宮殿を訪問した時、出口から一直線にプラ・パトム・チェディへ道路が敷かれており、鮮明に仏塔が見えた。ラタナコーシン朝の宮殿が意図的にこうした都市計画を持って建設されたことがはっきりわかる景観であった。

サナム・チャン宮殿は、ラーマ 6 世の別荘である。

【寺院の色について】(MoE)

タイの寺院の白色は希望や光を表している。金は仏陀の色で、花が黄色いのもそのためである。黒は死を連想させるので、日本の寺院のような色にはならないのではないかな。

【どのような時に訪れる場所なのか】(通訳さん)

プラパトムチェディに行くタイミングは人それぞれであり、毎日行ってもいいし、行かなくてもいい。誕生日には行ったほうがいいという話もある。通訳さんは興味がなから行かないけれど、頻繁に行くように親や先生が言ってくる。

また、学校の見学行事の行き先の 6 割はお寺で、4 割はキャンプやボーイスカウトというくらいたくさんお寺に行く。行事では珍しいところに行くから、バンコクの学校はプラパトムチェディには行かない。

◆学びや所感

日本において歴史的なものを修復するとなると、作り直すというイメージが強かったため、古いものの上から被せるように新しい部分を付け加えること、それが数回繰り返されていることに驚いた。

通訳さんからの視点しか聞けていないが、参拝の頻度については、熱心に通う人もいればそうでない人もいるということで、日本の寺社仏閣との距離感と似ていると感じた。一方で、正月に家族で参拝しに行く初詣のようなことは特に行わないとのことだった。それでも、「近所の子どもは、学校行事ではプラ・パトム・チェ

ディに行かなくても、それぞれが家族で行ったことがある」「親や先生から参拝を勧められる」といった話からは、タイならではの信仰との距離感が窺える。学校行事でも家族でも行くとすれば清水寺や東大寺、熱心に通うかどうかの差があるとすれば近所の神社ほどの感覚だろうか。

また、背後にそびえる仏塔が大きいので気づくのに時間がかかるが、北側の仏像もかなりの大きさであった。日光東照宮はカラフルな彫刻を風雨の被害から守るために職人が修復の方法を代々語り継いでいるという話を聞いたことがあるため、このように全身金色で屋外にある巨大な仏像そのものの修復はどのように行うのか気がになった。

(銅崎 智穂子)

ワット・アルン(暁の寺)

[バンコク] 2 月 21 日(金)



◆特色

ワット・アルンは、「暁の寺」として知られるタイの仏教

寺院であり、バンコクのチャオプラヤー川西岸に位置している。17 世紀のアユタヤ朝時代のタクシン王によって最初に建設されたといわれるが、現在の姿に大規模に改修されたのはラーマ 2 世（19 世紀初頭）からラーマ 3 世の時代である。高さ約 70 メートルの中央仏塔（プラーン）が特徴的で、その表面は色鮮やかな陶器や貝殻で装飾されている。この装飾は太陽の光を受けることで輝きを放ち、特に朝夕の景観は美しく、幻想的な雰囲気醸し出している。また、ワット・アルンはタイの歴史と宗教文化を象徴する重要な建築物として、多くの観光客が訪れる名所である。

歴史が色濃く反映されていることを改めて実感した。特に、仏塔の精巧な装飾や歴史的背景に触れることで、宗教と建築が密接に関わっていることを学ぶ機会となった。また、伝統衣装を着ることで文化体験の価値を深く理解し、異文化交流の重要性を改めて感じた。今回の訪問を通じて得た知識や経験を今後の教材研究に活かしていきたい。

（野々山 新）

◆流れ

1. 伝統衣装体験

訪問の際、タイの伝統衣装をレンタルし、ワット・アルンの荘厳な背景のもとで記念撮影を行った。華やかで繊細な刺繍が施された衣装に身を包むことで、タイの伝統文化を身近に感じる事ができた。参加者同士で互いに衣装の美しさを称賛し合っていた。

2. 僧侶のガイドによる見学

ワット・アルンの見学では、僧侶のガイドによる説明を受けながら寺院の歴史や建築の特徴について学んだ。本堂の修復時、ラーマ 5 世は独特な装飾を施すよう指示し、窓にはカンガルーや想像上のキリンが描かれたという興味深いエピソードが紹介された。また、仏塔の表面に使われているタイルや貝殻についても説明があり、それらが遠くから見ると細やかな模様を形作り、寺院全体の美しさを際立たせていることを理解した。

3. 自由見学

その後、自由にワット・アルンを見学し、各自でその魅力を堪能した。特に仏塔の階段は非常に急であり、実際に登ってみるとその険しさに驚かされた。これは仏教の教えにおける「悟りへの道の厳しさ」を象徴しているとされる。私たちは慎重に階段を上りながら、繊細な装飾や景色を楽しんだ。伝統衣装を着用したこともあって、記録として多くの写真を撮影し、思い出に残る体験となっていた。

◆学びや所感

ワット・アルンの建築や装飾には、タイの仏教文化や

リフレクション ミーティング

学び、「教育の多様性」への理解を深められたことは、
8名全員にとって大変貴重な財産になったと感じた。

(渡辺 大輔)



◆流れ

翌日のタイ教育省で実施される「プログラム評価会議」での15分間のプレゼンテーションに向けた準備を行った。2つのグループに分かれて、下記のトピックについてそれぞれ議論した。

<グループ1>

- ① 今回のプログラムで学んだ教訓は？
- ② タイと日本の教育環境の類似点と相違点は？

<グループ2>

- ① 今回のプログラムで最も印象的な学校は？
- ② 今後のアクションプランは？

◆学びや所感

今回参加した日本教員8名は、勤務校が校種（小・中・高）や教科だけでなく、公立・私立、共学・女子校の違いがあり、多様であったため、同じプログラムでも着眼点や捉え方がさまざまであった。

異なる教育環境に触れ、さまざまなタイプの学校を見学できたことで、教育者としての視点が広がり、個人としての価値観も大きく変わったことがお互いに確認できた。特に、タイの「Happy Learning」の考え方を

プログラム評価 会

タイ教育省

[バンコク] 2月21日(金)



◆流れ

1. プレゼンテーション① (Group1)

★プログラムから得た知見

- ・教育のポリシーを共有する重要さ

タイ教育省のかかげる SDGs4に基づくHappy Learning

・仏教に基づく幸せを願う哲学・王室への敬意など、タイには教育に対するポリシーが広く共有されていることが判明した。これにより、学校ごとの特色や戦略は様々であれど一貫した教育ができていているように思う。

★タイと日本の学校の相違点と共通点

特別支援の視点から考察した。

相違点

- ・今回見学した学校では小学校から高校までの一貫した支援を実施している学校があった。日本では校種を超えた特別支援の継続性が課題となっている。
- ・人材について:カセサート大学は特別なパターンだったかもしれないが、生徒に対する教員数が充実していた
- ・目標のコンサルティング:日本の特別支援学校より

も、「働くことができるように」ということに重きが置かれていた(日本の場合は、基本的な生活ができるように)

- ・小学校、中学校、高校の連携:日本は支援の継続性が低いように感じる

共通点

- ・学校が医療機関や専門家との連携をきちんと行っていること
- ・支援の方針が社会に出られるように、できるだけ一般の子どもと同じ活動をさせること。
- ・個別支援システムは個別のカリキュラムを組み、それぞれのペースで指導を行なっていること。

日本の支援の良さに「道徳教育」や「人権教育」の充実が挙げられる。周囲の人の理解が広がっている。その良さを活かし、中学校まで、あらゆる生徒が同じ教室にいる教育を行いたい。

2. プレゼンテーション② (Group2)

★最も印象に残った学校

SDGs4「すべての人に教育を」の観点から、それに最もあてはまるという視点で、最も印象に残った学校はカンチャナピセク非公式教育センターである。

- ・国籍、年齢、経済状況に関係なく学べる施設であること
- ・学びを通し、様々な世代・背景を持つ人々の出会いにつながる
- ・個人の成長が、文化の伝承につながる
- ・教育の成果が社会の発展につながる
- ・教員の研修につながる

★プログラム後のアクションプラン

SDGs4を達成するためにどのようにアプローチしていくのか?

- ・日々の授業を通し、言語的多様性・国際理解・インクルーシブ教育を推進する
- ・教員研修を通し、教育システム・学校文化に改革をおこす
- ・地域とのコラボレーションを見据えてアプローチをしていきたい。

3. タイ教育省よりプログラムまとめの動画

4. プログラム修了書の交付

◆学びや所感

プレゼンテーション①の内容について、タイの教育ポリシーを教育する重要さを自分自身も実感する場面が多かった。今回訪問した学校、生徒・児童は非常に穏やかでのびのびとしていると感じた。それには様々な要因があると思われるが、そのうちの一つは「Happy Learning」の理念、仏教の教えが関連しているように感じる。今回の訪問中、何人かの先生から「生徒の幸せのために」という言葉が何度か聞かれた。「幸せ」ということばがすぐに出てくるすばらしさに感動するとともに、Happy Learning の理念が多くの先生の間で共有されているからこそその穏やかさなのかもしれないと感じた。今後もタイとの交流を続け、タイで感じた穏やかさを作り出すヒントを見つけていきたい。

特別支援に関する点で、個人的に気になったことは、保護者の理解がどれほどあるのかという点である。カセサート大学実験校の特別プログラムの説明を受けた際は、「なかなか認めてくれない保護者もいる」と説明があった。この状況は日本と変わらないのだと思った一方で、渡航前のオリエンテーションでは、広島大学の牧先生の講演の中で、「タイでは、障がいや前世の行いによるものという考えがある」と話があった。仏教の考えが特別支援に対する理解を阻害しているのか、今回のプログラムではわからなかったが、タイも日本も保護者の理解を得ていくための努力が必要だと感じた。

プレゼンテーション②に関しては、SDGs4を最も体現している学校であるという理由で「カンチャナピク非公式教育センター」が最も印象に残った学校として挙げられた。アクションプランを考えるにあたり、普段自分の授業が、あまり SDGsを意識していないことに気づかされた。たとえば「地域連携」という言葉について、これは生徒や児童が地域を知るためのもの、という認識があった。しかし今回、地域ボランティアが学校に積極的に介入している姿を見て、学校と地域が繋がることで、地域の人々に学びや出会いの機会を与えているということに気が付いた。今後、本プログラムの経験を発信するにあたり、授業を活用していきたい。その際SDGs4の観点から、周辺地域を巻き込むというところに特に重点を置きたいと思った。

3. 参加者の声

参加者の声

東京都板橋区立紅梅小学校

副校長 石原 清



◆感想

タイの教育について現地を訪問して体感することはこのようなプログラムでなければ経験できないと思う。現地スタッフと共に行動しながらタイの方々の優しさを強く感じた 5 日間であった。『ハッピーラーニング』の方針が訪問した全ての教育機関に行き届き、児童生徒、教員が体現しているように感じとれたことは日本の教育現場に変化をもたらせたいと感じる学びとなった。同行した日本の視察団メンバーには、多くの刺激をもらうことができ、今後も互いに高め合う存在としてつながっていききたいと強く感じた。

◆一番印象的だった、または良かったと感じる活動

カセサート大学実験学校での小学部見学ならびに、ふれあいでは、生き生きとした授業風景、手厚い支援体制をみることができ小学校教員として、日本の現場と比較しながら教育環境の素晴らしさ実感することができた。また、交流の足掛かりとして、高校の日本語クラスとオンラインで繋がりをつくっていきたい。

愛知県立明和高等学校

教諭 岡 真夕子



◆感想

タイの教育について幅広く学ぶことができ、とても充実した 6 日間でした。様々な学校を訪問し、現場の先生方や生徒と触れ合い、教育の意味や目的を再確認できたと思います。また、日本の先生方とは、教育について、タイの現場について考えたことを連日議論して共有することができ、視野が広がったと思います。

◆一番印象的だった、または良かったと感じる活動

各学校で、先生方が熱心に生徒と向き合う姿が印象的でした。特に視察前にはあまり知らなかったタイの特別支援教育について、日本であれば障害別に分けていることが多いように思いますが、幅広く生徒を受け入れ、共に育てていく姿勢がとても素晴らしいと感じました。

実践女子学園中学校高等学校
ESD 推進部長 渡辺 大輔



◆感想

今回のプログラムでは、さまざまなタイプの学校を見学することができ、タイにおける教育の多様性に驚いた。また、タイ教育省が推進する教育方針「Happy Learning」が大変印象に残った。「詰め込み教育からの脱却」だけではなく、「学習環境の向上」や「幸福感とウェルビーイングの向上」といった包括的な目標が含まれており、同じ課題を抱えている日本でも、Happy という概念が教育にも必要であると強く感じた。

◆一番印象的だった、または良かったと感じる活動
文化交流(特に、「着付け・茶道」「書道」)でのタイ生徒の笑顔がとても印象に残った。日本の文化を紹介するとすぐに熱心に取り組む生徒が多く、日本への興味や関心の高さを実感することができた。このような「日本人教員がその場で実演したのを見て、実際に一緒にやってみる」という原体験が、今後の日タイのさらなる交流促進に必要だと感じた。

愛知県立大府高等学校
野々山 新



◆感想

私自身の教育観を解体するとともに、再構築する機会となったと感じている。教育観の解体については、自国の教育文化以外に触れることを通して、私自身が、所属する学校や教育委員会が、あるいは日本として行っている教育行政が推進してきている教育システムを相対化する機会となったことによる。

例えば私の主たる問題関心であった多文化共生社会の実現に向けた現状と課題の分析という枠組みにおいては、多様な宗教やルーツを持つ人々との共生はタイ社会で日常のことなのである。学校で教育するものというよりも、生活することで身に付けていく習慣に近いのであろう。私はこれまで多文化共生社会の実現に向けた教育の在り方を学校教育の枠組みで捉えていたが、この固定概念を解体する必要性に駆られたのである。異なる教育文化の観察を通して自身を相対化することの意義を改めて感じさせられた。

再構築については、教育は学校や教員のみが行うべきという価値観にとらわれず、地域や社会と協働しながら行うことによってさらなる効果が期待できると思い至ったことによる。生徒を対象とした学習内容を習得する成果についてのみ論じるならば、この考えは適当ではないかもしれない。しかし、教育するのは、あるいは教育をされるのは誰なのだろうか。タイのノンフォーマル教育では、学齢期にこだわらずに教育を受け

る機会が提供されていた。学校という場が、地域社会に開かれる可能性を目の当たりにしたのである。つまり、学校生徒の学習のみならず、教育を求める人全ての学習を促しうるのである。個人の成長が、個人の成果に留まるのではなく、社会全体の成長につながるという理念は、私の教育観を再構築することにつながっている。

本プログラムの経験は、SDGsの4番目「質の高い教育をみんなに」が指す、質とは何か、教育とは何かそしてみんなとは誰か、これを狭義な認識から広義な認識へ拡張することとなった。こうした認識の変容を仲間たちとも吟味し、共有し、実践していきたい。個人ではなく、こうした変化を受容し、新たな価値を創出していける素地を持つ集団がチェンジメーカーなのだと思う。改めて、こうした機会を提供してくださったことに深く感謝したい。

◆一番印象的だった、または良かったと感じる活動
タイにおける活動は、訪問先全てに特色があったことから、いずれも印象的なものであった。このことを念頭に置きつつ、改めてなぜ全ての活動が自身に印象付けられているのかを考えた時、思い当たるのは事前のオリエンテーションであった。前回の参加者からの有益な情報と反省から、自身で訪問の主題を定めて臨むことの意義が予め強調されていた。出国前日にも、訪問の目的を個々人が表現する活動が組み込まれていた。これらに沿って自身の問題関心を明確にしていたからこそ、訪問先の学校がいかに多様であっても、質疑応答において一貫した調査ができたものと考えられる。

以上のことから、今回の訪問事業の質を高める上で「一番良かった」ものとしては事前オリエンテーションであったと考える。なお、印象に残ったのは授業に臨んでいる教師との対話である。飾らない本音の部分を垣間見ることのできる時間であった。この対話で、初めて教師の労働環境が垣間見えた。週のうちに空き時間が半数以上を占めているとのことであった。この余白があるからこそ、生徒を探究学習に誘うことができるのであろうと考えている。

滋賀県竜王町立竜王西小学校

大澤栄里



◆感想

多様な種類の施設を見学させていただき、大変勉強になりました。また、同行した先生方とのディスカッションも常に学びの連続で、有意義な時間を過ごすことができて感じています。タイの教育理念には本当に感銘を受け、今後の教師人生で大切にしたい言葉の一つになりました。

◆一番印象的だった、または良かったと感じる活動
生徒たちとの文化交流です。日本の文化を紹介したり、コミュニケーションを取ったりすることができてとても楽しかったです。実際に行くことでしか得られない貴重な経験ができたと思います。

長野県丸子修学館高等学校

教諭 盛田 彩花



◆感想

タイという国がより一層好きになり、またより興味が湧きました。今回訪れた学校は、先生も児童も生徒も、穏やかでのびのびとした雰囲気が印象的でした。現在、日本の学校にはどこもなく閉塞感や余裕のなさを感じてしまいます。タイで感じたこの雰囲気がどのようにして形作られているのか、経験をもとに考えるとともに、これからも交流を続け、穏やかでのびのびとした雰囲気の学校を作るヒントを得ていきたいです。

◆一番印象的だった、または良かったと感じる活動

参加者で企画した文化交流です。理由としては最も生徒とコミュニケーションを取る時間があったためです。言葉でコミュニケーションをとることが難しい生徒も多くいましたが、ダンスや着物、書道などを通し、笑顔になってくれる姿を見れたことは自分にとって宝物のような経験になりました。現地に行って現地の人々と触れ合うことの楽しさを再認識するとともに、この記憶や感情をできるだけ日本の生徒たち伝え、国際交流に興味を持つ生徒を増やしていきたいと感じました。

小金井市立小金井第二中学校

教諭 銅崎 智穂子



◆感想

とても充実した一週間を過ごすことができた。タイにおける教育を学ぶことで、日本の教育の現状も考えることができた。また、日本からともにタイに向かった仲間からも学ぶことが多かった。自分は中学校時代が楽しくなくて、でも中学校は義務教育で私立受験しない限り地域縛りのある逃れられない環境であるから、なんとか楽しくて居心地の良い教室を未来の子どもに創れないだろうか、と考えたことが中学校教員を目指したきっかけである。そのため、生徒に選ばれる側である高校の先生の視点や、競争率の高い学校の取り組みを学んだことで、より一層、望んでいないのに学校にいる子どもたちのこと、中学生に身につけてほしい力のことなどを考えられた気がする。

◆一番印象的だった、または良かったと感じる活動

カセサート大学の雰囲気がとても居心地がよかった。教員同士がファミリーのようであること、「子供達が成長できると信じている!」と信じていることが、話した先生や日本語を学んだ生徒たちののびのびした感じから伝わってきて感動した。だからこそ、教員同士が不仲だったり教員が元気がない状態だったりすると生徒にはバレバレなのだろうなということも、自分のこれまでを振り返って反省する機会になった。なにより私が記念品を忘れてしまったナコンパトム聾学校の先生方、本物のマイペンライをもらいました。代わりに小分けお菓子を渡すことにしたときも、生徒に混ぜって先生たちもノリノリでお菓子を選んでくれて嬉しかったです。

愛知県立東海樟風高等学校

教諭 早稲倉 啓吾



◆感想

このプログラムが終わって『幸せ』についてモヤモヤと考えるようになりました。

僕は自分の置かれた立場や任された役柄を全うすることを意識してこの教育という世界にいます。それは大学院の頃の師匠に「教師は劇団員だよ、社会が、学校が、生徒が、あなたに何を求めているの？あなたは何かができるの？」番最高な教師はピエロのような教師じゃないかな」と言われたことがキッカケです。学校としてどんな生徒を育てたいか、学校の先で生徒が何を求められているのか、そこを中心に考え、生徒と関わってきました。

もちろん言いたくないことも言わなければいけない。生徒のために個人の意見としてではなく、早稲倉先生として言わなければいけない。もっと自分は自由に発言をし、色んな人間がいる面白さを伝えたい。

色々なギャップが積み重なって、軸が揺らぎそうになることもありました。しかし、この研修に参加して「チェンジメーカー」と呼ぶに相応しい日本教職員の方、「幸せ」について考え抜いているタイ教職員の方に出会えて、少し肩の荷が降りたような、そんな気がしました。

自分自身の幸せ、生徒の幸せ、保護者・学校・国の幸せ、その幸せにどう貢献していけるか。常に考え、可能ならば死ぬまで教育に関わって生きていきたいと思いました。

今のところ、僕の幸せは「毎朝、具の違う味噌汁を飲むこと」と結論付けます。

◆一番印象的だった、または良かったと感じる活動

1 番印象に残ったことは、同じ派遣団の野々山先生との会話です。

ある学校で生徒が職に就くための授業を行う場所を見て回っていた際、野々山先生が「一次産業ばかりで、生徒に対して『これしか生きる道はない』って言うようで自分は悲しく思ってしまった。」と溢しており、僕の心が揺れ動いた。

正確なニュアンスはもっと違う意見だったのかもしれないが、僕はそう受け取り、確かに、と思った。僕は父親が機械いじりが得意で、その仕事ぶりをよく見ていた。ゴツゴツの手をしているくせに、やけに繊細な動きで、仕事仲間から信頼され、愛されていたように思える。そんなところから、職人に対するリスペクトが根底にあり、そういうことの適性を測ったり、極められる良い学校だなと思っていた。しかし、現代においては、もっと世界は広く、確かに一次産業に限らなくても良いと思う。

このような一言で僕も生徒の心を揺れ動かす人間になりたいと思った。

僕の中でチェンジメーカーとは、ガンガン革命を起こしていく改革者だと思っていたが、野々山先生や渡辺先生のような、素朴な疑問やフラットな視点、柔軟な心を持ち、人を揺れ動かすような声かけや言葉、思考を持つ人でもあるなと強く思った。

事業担当者コメント

「新しい学び」「新時代に求められる教職員像」を考えることをテーマに今年度の事業が実施されました。多忙な毎日を学校で過ごす日本の先生方が自らのコンフォートゾーンを飛び出し、日本全国の多数の応募者の中から選ばれた 8 名の先生と「出会い」、そして真冬の日本から真夏のタイで約 1 週間を共にしました。最初は不安の声が聞こえてきましたが、オンライン、出発前、そしてタイでの滞在を通じて、日々の移動中の会話、バスや食事の席でのリフレクションや対話、さまざまな場面を共に乗り越え、同じ釜の飯を堪能しながら、日本の参加者は訪問団になっていきました。

タイでは 6 つの学校を訪問することができました。大学の附属学校、地域の優良校、特別支援学校、職業教育に力を入れている専門学校、理系でトップの学校、ノンフォーマル教育を提供する学校です。タイという異文化に触れ、タイに「出会い」、自己や日本を相対化しながら、これからの教育を探究する上で、プログラムでの活動は生の貴重な教材でした。自らの経験を大切に積み重ねることのみならず、互いに気遣い訪問団としても多くの成果を得られるよう意欲的にプログラムに臨んだ 8 人の日本の先生は、これから教育現場のチェンジメーカーとしてどのように変容し、手を携え、未来をつくっていくでしょうか。

このプログラムは、10 日足らずの日数で実施され、プログラム期間中に何かの解が提供され、完結するわけではありません。プログラムの中でのさまざまな「出会い」から参加者それぞれが学びの種や経験を持ち帰り、これからの教育活動、教育実践の過程で育んでいくことが期待されています。すでに、担当する学級や教科において、タイについて語り、探究活動が始まっているようです。給食にタイ料理を提供することにした先生もいます。タイのことを話す姿は活き活きとしている、という感想を生徒からもらった先生もいたようです。先生の経験や学びが徐々に児童生徒に広がっていることが伝わります。折に触れ、カラダとココロでタイを感じた日々や互いに交わした言葉を思い出し、未来の「わたし」「せんせい」「学び」を共に創るパワーにしていってくださることを願っています。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

国際教育交流部 伊藤 妙恵



付録



事前オリエンテーション(日本)



事前オリエンテーション(日本)



タイ出発前の意気込み



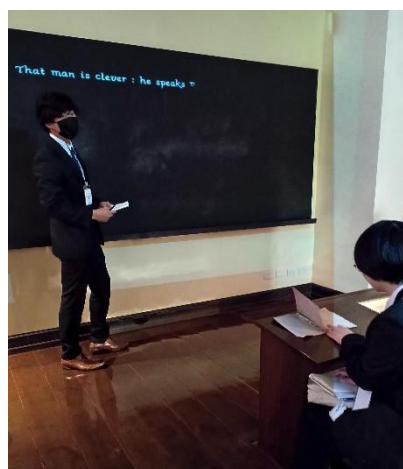
ダンスの練習(日本)



ダンスの練習(日本)



タイ教育省表敬訪問



タイ教育省博物館で模擬授業



タイ教育省でのブリーフィング



カセサート大学実験学校



カセサート大学実験学校



ナコンパトム聾学校



ナコンパトム聾学校



ナコンパトム聾学校



ナコンパトム聾学校



プラパトム・ウィッタヤライ学校



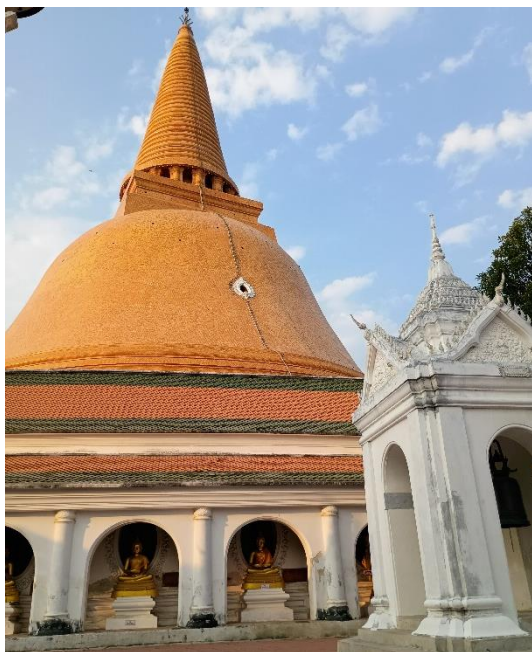
プラパトム・ウィッタヤライ学校



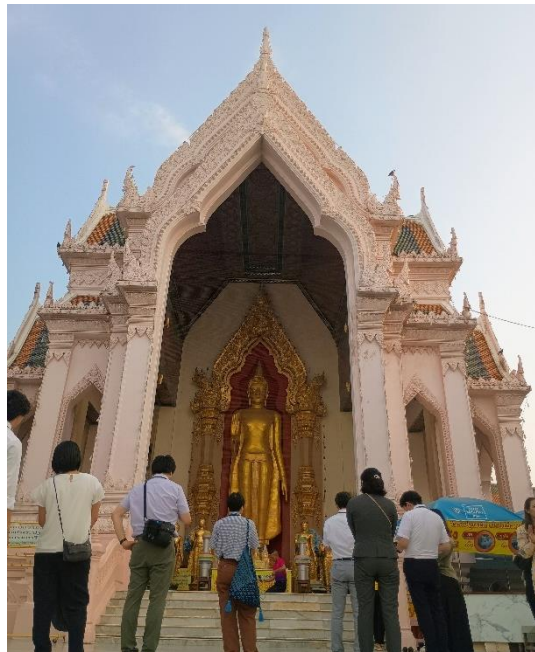
プラパトム・ウィッタヤライ学校



プラパトム・ウィッタヤライ学校



プラ・パトム・チェディ



プラ・パトム・チェディ



プラ・パトム・チェディ



プッタモントン産業・コミュニティ専門学校



プッタモントン産業・コミュニティ専門学校



プッタモントン産業・コミュニティ専門学校



プッタモントン産業・コミュニティ専門学校



プッタモントン産業・コミュニティ専門学校



カンチャナピセク非公式教育センター
(ロイヤルアカデミー)



カンチャナピセク非公式教育センター
(ロイヤルアカデミー)



カンチャナピセク非公式教育センター
(ロイヤルアカデミー)



カンチャナピセク非公式教育センター
(ロイヤルアカデミー)



マヒドン・ウィッタヤヌソン学校



マヒドン・ウィッタヤヌソン学校



マヒドン・ウィッタヤヌソン学校



マヒドン・ウィッタヤヌソン学校



マヒドン・ウィッタヤヌソン学校



マヒドン・ウィッタヤヌソン学校



マヒドン・ウィッタヤヌソン学校



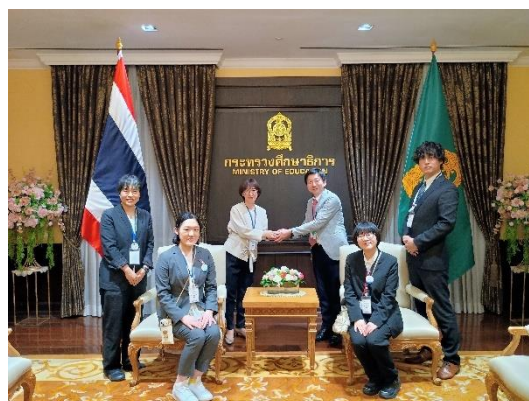
マヒドン・ウィッタヤヌソン学校



タイ教育省でのプログラム評価会



タイ教育省



タイ教育省



タイ教育省



タイ教育省



暁の寺 (ワット・アルン)



暁の寺 (ワット・アルン)

これまでのプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2018 年 8 月 26 日～9 月 1 日	バンコク、ナコンサワン、アユタヤ	5 名（他、MEXT・ACCU から計 2 名）
2019 年 9 月 1 日～9 月 7 日	バンコク、カンチャナブリー	7 名（他、MEXT・ACCU から計 2 名）
2021 年 9 月 13 日～9 月 17 日	オンライン	5 名
2022 年 9 月 19 日、20 日、23 日	オンライン	15 名
2023 年 8 月 28 日、9 月 2 日、 9 月 3 日～8 日、10 月 28 日	オンライン、バンコク、ナコーンラーチャ シーマー、サラブリー	6 名（他、MEXT・ACCU から計 2 名）
2025 年 2 月 9 日、2 月 15 日、 2 月 16 日～22 日	オンライン、バンコク、ナコーンパトム	8 名（他 ACCU から 1 名）

文部科学省委託 令和 6 年度新時代の教育のための国際協働プログラム
初等中等教職員国際交流事業
タイ政府日本教職員招へいプログラム(タイ派遣プログラム) 実施報告書

2025 年 3 月

編集・発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

電話 (03)5577-2853

Email exchange@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

本報告書は、文部科学省の委託事業として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが実施した「新時代の教育のための国際協働プログラム(初等中等教職員国際交流事業)」委託事業のうち、タイ政府日本教職員招へいプログラム(タイ派遣プログラム) について取りまとめたものです。従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

©2025 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)